

子どものからだと「ヒトの危機」論 ：日本の子どものからだに関する実感と実態を基に

The “Homo sapiens crisis” based on actual feelings and situations about physical functions in Japanese children

野井 真吾¹⁾
Shingo NOI

Abstract

It was in 1975 that Prof. Masaki proposed the “human crisis” hypothesis based on children’s physical abnormalities, and it was revised into the theory in 1991. What is the current situation of children’s physical issues over 30 years since then? Has the “human crisis” been overcome? Under such awareness of this problem, this review explores potential solutions by examining the evolution of actual feelings and situations related to “physical disorders” and drawing lessons from the COVID-19 pandemic. As the results, it was still confirmed the children’s “physical disorders”. Therefore, it can be said that the “human crisis” that was warned in 1991 remains unresolved. Not only that, but it was also confirmed that “disorders” which were considered the growth and development level problem at the time, have reached the survival and protection level problems in just over 30 years. Among these, the survival issues indicated by the suicides of children and young people can be seen as a “crisis” related to the sustainability of the species. Hence, in this report, the previous “human crisis” has been modified to the “Homo sapiens crisis”. However, similarly to “physical disorders”, in the COVID-19 emergency survey, we learned the condition for protecting and nurturing humanity from children that instinctively recognized and implied. They conveyed a message encapsulated in the simple yet profound idea: “Move and become Homo sapiens, gather and become human”. It was also considered that this condition could serve as a potential clue to addressing “physical disorders” in children.

Keywords : 人間の危機, からだのおかしさ, 実感調査, 実態調査, 新型コロナウイルス感染症緊急調査
human crisis, physical disorders, actual feeling survey, actual situation survey,
COVID-19 emergency survey

1. 緒言：「人間の危機」論と本稿の問題意識

1.1 「人間の危機」論

子どものからだに表れた異変を踏まえて、正木氏

が「人間の危機」仮説を提示したのはおよそ半世紀前の1975年、それを論としたのは30数年前の1991年のことである。同氏の報告(1991)を基に、その概要を整理してみると次のようになる。

1975年9月に開催された日本教育学会第34回大

1) 日本体育大学体育学部、子どものからだ研究所 (Faculty of Sport Science, Nippon Sport Science University / Research Institute for Children's Physical Health)

会における課題研究での報告「能力・人格の発達と教育・体育学の立場から一」において、当時の体力・運動能力調査の結果を分析した同氏は、多くの体力要素の中で背筋力のみが低下していることを報告している。そして、「人間の危機」という内容は、背筋力の低下により筋肉から大脳へのもどりの信号量が減少し、大脳前頭葉の活動が低下することが“人間的な危機”となるということ、またそのことによって背筋力が一層低下していくということに要約できる」とした。

その反響は、上矢作町教育研究会、中津川学力充実委員会に端を発して各地に及び、子どものからだの調査や研究が行われる契機となった。また、種々の議論を踏まえて、疾病や異常とはいえないが、さりとてとても正常とはいえない“からだのおかしさ”の概念に辿り着くことになる。

さらに、このような事態にマスコミも呼応する。1978年10月9日には、NHKが特集番組『警告!! 子どものからだは蝕まれている!』を放映している。この番組制作に際して、“からだのおかしさ”が全国的にどの程度の広がりや深まりを示しているのかということ調査しようと考えたNHKは、日本体育大学体育研究所にその調査協力を依頼し、「子どものからだの調査(通称、「実感調査」)」が行われることになった(日本体育大学体育研究所, 1981)。調査では、全国の小学校、中学校、高等学校1,000校に勤務する養護教諭を対象に、種々の研究会やサークル、さらには過去3年間の新聞記事で収集した“おかしさ”を取り上げ、それらに対する実感を尋ねる方式が採用された。その調査に基づいて制作された同番組の内容は、背筋力の低下という1点から提示した「人間の危機」仮説の想定を越え、はるかに深刻な事態であったという。また、その反響も予想を上回るものであったという。

ただ、番組は1回きりの特集番組であった。そのため、子どものからだについて集団で議論できる場が求められ、翌1979年3月、国際児童年の一事業として「子どものからだと心・連絡会議」が結成されることになった。以来、同連絡会議は、毎年「子どものからだと心・全国研究会議」を開催し続けている。また、1989年からはその討議資料として『子どもの

からだと心白書』を発行、2003年からは全国の書店でも取り扱われるようになっていく。

さらに、この種の議論は当時から生死の問題を第一級、病気・ケガの問題を第二級、発育・発達上の問題を第三級といった3段階に分けて行われている。そして、「最近の子ども達のからだで問題になっていることは、第一級の生・死の問題は減少し、第二級の病気・ケガの問題も大きくみると減少しているなかで、第三級の“発育・発達上のゆがみや遅れ”の問題が中心であるとみることができよう」という当時の議論の到達点も示されている。

このように、子どもの背筋力の低下という事実に基づいて示された当初の仮説は、その後の議論の中でそれだけには止まらないことが明らかにされて“からだのおかしさ”という概念に辿り着くとともに、実感調査や実態調査の成果も踏まえて、1991年には「人間の危機」論に進展している。

1.2 本稿の問題意識

以来30数年、当時子どもが自らのからだを犠牲にして表出した「人間の危機」は、解決されたのだろうか。それとも、未解決のままなのだろうか。その後も、“からだのおかしさ”が確認され続けていることを勘案すると、その答えは未解決といわざるを得ない。

そのため、われわれの社会は「危機」という言葉を使って発せられたこの警鐘に真正面から向き合い、適切に対応してきたとはいえないことになる。でも、どうしてそのようなことになってしまったのだろうか。原因は、定かではない。「たいした問題ではない」といった楽観的な認識にあったのかもしれない。あるいは、「何とかなるだろう」といった希望的な認識にあったのかもしれない。さらには、「そうはいっても、どうしたらいいのかわからない」といった戸惑いの結果といえるのかもしれない。とはいえ、科学は積み上げの作業である。そのため、社会全体で向き合わない限り、一部の専門家や関係者だけでは解決できないほどに子どもの“からだのおかしさ”が大きな問題に膨れ上がってしまったいま、その後の研究成果を積み上げておくことは、この分野の研究者に課せられた社会的責務である。こ

こに、本稿の問題意識がある。

そこで本稿では、先の「人間の危機」論が示されてから30数年が経過した現在、子どもの“からだのおかしさ”の実感と実態を踏まえて、その現在地を提示するとともに、新型コロナウイルス禍（以下、「コロナ禍」と略す）で得た教訓も考慮して、“からだのおかしさ”の解決の糸口を探究してみたい。

2. “からだのおかしさ”の変遷

繰り返しになるが、わが国における子どもの“からだのおかしさ”はますます多様で、深刻な様相を呈している。そのことは、NHKと本学体育研究所の共同調査として実施された最初の実感調査以降も、子どものからだの変化の方向性を探るために、ほぼ5年に1度のペースで継続的に行われてきた実感調査の結果がそれを推測させる。また、それらの実感調査の結果に導かれて行われてきた子どものからだの実態調査の結果もそれを物語っている。

ここでは、それらの調査の結果を概観し、この間の“からだのおかしさ”の変遷を整理してみたい。

2.1 実感調査の結果の変遷

表1には、これまで行われてきた実感調査における「最近増えている」の回答率のワースト5を示した（子どものからだと心・連絡会議，2023）。この表が示すように、1978年の実感調査における「最近目立つ」の回答のワースト3は、小学校が1位「背中ぐにゃ」、2位「朝からあくび」、3位「アレルギー」、中学校が1位「朝礼でバタン」、2位「背中ぐにゃ」、3位「朝からあくび」と「アレルギー」、高等学校が1位「腰痛」、2位「背中ぐにゃ」と「朝礼でバタン」であった。

ところが、その後の調査における「最近増えている」の回答のワースト1は、学校段階を問わず、「アレルギー」や「すぐ“疲れた”という」といった時期を経て、直近2020年調査では「ネット・ゲーム依存」に至っている。さらに、ワースト3というところまで拡大してみると、小学校では「皮膚がかさかさ」、「視力が低い」、「授業中、じっとしていない」へと、

中学校では「視力が低い」、「首、肩のこり」、「不登校」、「平熱36℃未満」へと、高等学校では「腹痛、頭痛を訴える」、「平熱36℃未満」、「うつ傾向」、「夜、眠れない」へと上位項目が変遷している。同様に、その後の調査で対象に加わった保育所、幼稚園の上位項目は、「むし歯」や「背中ぐにゃ」、「すぐ“疲れた”という」といった問題に始まり、その後は「アレルギー」、「皮膚がかさかさ」といった時期を経て、現在では「保育中、じっとしていない」や「AD/HD傾向」等といった問題に至っている。

このような実感の背景やそこから予想される問題に関する現在の議論は、直近の実感調査の報告（野井ほか，2022）に譲るが、子どもの“からだのおかしさ”が依然として解決されていないことを推測させる。ただ、これまでの実感調査の結果で注目すべきはそれだけでない。それらの項目の回答率を観察してみると、どの項目も軒並みそれが上昇している。つまり、一つの問題が解決されないまま、次の問題、そのまた次の問題と“からだのおかしさ”がますます多様化、深刻化の一途にあることを推測させるのである。

2.2 実態調査の結果の変遷

そうはいつても、このような実感調査の結果は、保育・教育現場の実感を収集したものに過ぎない。そのため、実感の事実ではあるものの、子どものからだの実態の事実とはいえない。ここに、これらの実感から心配される子どものからだの実態調査の必要性があるとともに、それが精力的に実施されてきた所以がある。ここでは、最新の『子どものからだと心白書』（子どものからだと心・連絡会議，2023）を基に、多くの実感の身体的背景に予想されている前頭葉機能、自律神経機能、睡眠・覚醒機能に関するこの間の調査結果を概略的に紹介したい。

「保育・授業中、じっとしていない」、「すぐ“疲れた”という」、「ネット・ゲーム依存傾向」、「うつ傾向」等といった実感は、前頭葉機能の問題を予想させる。そのためわれわれは、go/no-go課題といった手法を用いて前頭葉機能の実態把握に努めている。それによると、最も幼稚で落ち着かない「不活発型」の男子の出現率が1969年調査よりも1998年調査、

表1 「最近増えている」という「からだのおかしさ」の実感ワースト5（ただし、1978年は「最近目立つ」、1979年は「年々増えてきている」）

保健所	1979年 (n=195)	1990年 (n=223)	1995年 (n=64)	2000年 (n=154)	2005年 (n=201)	2010年 (n=90)	2015年 (n=199)	2020年 (n=125)
第1位 むし歯 (24.2)	アレルギー (79.9)	アレルギー (79.9)	アレルギー (87.5)	すぐ“疲れた”という (76.6)	皮膚がかさかさ (77.6)	皮膚がかさかさ (65.6)	アレルギー (75.4)	保育中、じっとしていない (76.8)
第2位 背中ぐにや (11.3)	皮膚がかさかさ (76.4)	皮膚がかさかさ (76.4)	皮膚がかさかさ (81.3)	アレルギー (76.0)	アレルギー (74.6)	すぐ“疲れた”という (63.3)	背中ぐにや (72.4)	AD/HD傾向 (64.0)
第3位 すぐ“疲れた”という (10.5)	背中ぐにや (67.7)	すぐ“疲れた”という (67.7)	すぐ“疲れた”という (76.6)	皮膚がかさかさ (73.4)	背中ぐにや (72.1)	すぐ“疲れた”という (68.7)	皮膚がかさかさ (71.9)	背中ぐにや (62.4)
第4位 朝からあくび (8.1)	すぐ“疲れた”という (63.3)	すぐ“疲れた”という (63.3)	そしゃく力が弱い (71.9)	背中ぐにや (72.7)	すぐ“疲れた”という (68.7)	保育中、じっとしていない (60.0)	保育中、じっとしていない (70.9)	夜、眠れない (60.0)
第5位 指吸い (7.2)	そしゃく力が弱い (59.4)	そしゃく力が弱い (59.4)	背中ぐにや (70.3)	そしゃく力が強い (64.3)	保育中、じっとしていない (60.0)	保育中、じっとしていない (60.0)	すぐ“疲れた”という (67.3)	絶えず何かをいじっている (59.2)
幼稚園	1990年 (n=193)	2000年 (n=162)	1995年 (n=115)	2000年 (n=162)	2005年 (n=188)	2010年 (n=105)	2015年 (n=104)	2020年 (n=75)
第1位	アレルギー (72.3)	アレルギー (82.7)	アレルギー (74.8)	アレルギー (82.7)	アレルギー (77.1)	アレルギー (72.4)	アレルギー (75.0)	保育中、じっとしていない (70.7)
第2位	皮膚がかさかさ (68.0)	すぐ“疲れた”という (73.9)	すぐ“疲れた”という (73.9)	すぐ“疲れた”という (76.5)	すぐ“疲れた”という (72.9)	すぐ“疲れた”という (65.7)	背中ぐにや (73.1)	背中ぐにや/発音が気になる/アレルギー (60.0)
第3位	すぐ“疲れた”という (57.8)	皮膚がかさかさ (68.7)	皮膚がかさかさ (68.7)	皮膚がかさかさ (69.1)	皮膚がかさかさ (66.0)	背中ぐにや (63.8)	すぐ“疲れた”という (71.2)	
第4位	ぜんそく (54.9)	ぜんそく (67.3)	ぜんそく (67.3)	ぜんそく (67.3)	背中ぐにや (64.9)	ぜんそく (62.9)	オムツがとれない/自閉傾向 (69.2)	
第5位	背中ぐにや (53.4)	背中ぐにや (66.0)	背中ぐにや (66.0)	背中ぐにや (66.0)	床にすぐ寝転がる (60.1)	自閉傾向 (61.9)	オムツがとれない (58.7)	
小学校	1978年 (n=569)	1990年 (n=363)	1995年 (n=192)	2000年 (n=601)	2005年 (n=306)	2010年 (n=329)	2015年 (n=518)	2020年 (n=445)
第1位 背中ぐにや (44)	アレルギー (87.3)	アレルギー (88.0)	アレルギー (88.0)	アレルギー (82.2)	アレルギー (82.4)	アレルギー (76.6)	アレルギー (80.3)	ネット・ゲーム依存傾向 (78.4)
第2位 朝からあくび (31)	皮膚がかさかさ (72.6)	すぐ“疲れた”という (77.6)	すぐ“疲れた”という (77.6)	すぐ“疲れた”という (79.4)	背中ぐにや (74.5)	授業中、じっとしていない (72.3)	視力が低い (65.6)	視力が低い (76.4)
第3位 アレルギー (26)	すぐ“疲れた”という (77.6)	視力が低い (76.6)	視力が低い (76.6)	授業中、じっとしていない (77.5)	授業中、じっとしていない (72.5)	背中ぐにや (69.3)	授業中、じっとしていない (65.4)	アレルギー (67.0)
第4位 背筋がおかしい (23)	歯ならびが悪い (69.9)	皮膚がかさかさ (71.4)	皮膚がかさかさ (71.4)	背中ぐにや (74.5)	すぐ“疲れた”という (69.9)	視力が低い (67.2)	背中ぐにや (63.9)	AD/HD傾向 (61.6)
第5位 朝礼でボタン (22)	視力が低い (68.9)	歯ならびが悪い (70.8)	歯ならびが悪い (70.8)	歯ならびが悪い (73.2)	皮膚がかさかさ (65.7)	すぐ“疲れた”という (63.5)	すぐ“疲れた”という (62.9)	授業中、じっとしていない (57.5)
中学校	1978年 (n=224)	1990年 (n=216)	1995年 (n=121)	2000年 (n=274)	2005年 (n=151)	2010年 (n=210)	2015年 (n=256)	2020年 (n=260)
第1位 朝礼でボタン (43)	アレルギー (90.8)	アレルギー (87.6)	アレルギー (87.6)	すぐ“疲れた”という/アレルギー (82.8)	アレルギー (76.8)	アレルギー (78.1)	アレルギー (81.2)	ネット・ゲーム依存傾向 (78.5)
第2位 背中ぐにや (37)	すぐ“疲れた”という (83.8)	視力が低い (83.8)	視力が低い (83.8)	すぐ“疲れた”という (73.5)	平熱36℃未満 (71.0)	平熱36℃未満 (70.7)	不登校 (74.6)	視力が低い (72.7)
第3位 朝からあくび/アレルギー (30)	視力が低い (78.1)	すぐ“疲れた”という (71.9)	すぐ“疲れた”という (71.9)	首、肩のこり/不登校 (77.0)	平熱36℃未満 (68.9)	すぐ“疲れた”という (70.0)	首、肩のこり (68.0)	頭痛を訴える (68.1)
第4位	腹痛、腰痛を訴える (75.9)	腹痛、腰痛を訴える (71.1)	腹痛、腰痛を訴える (71.1)	首、肩のこり/不登校 (76.6)	視力が低い (67.5)	夜、眠れない (69.0)	夜、眠れない (67.2)	頭痛を訴える (66.9)
第5位 首、肩のこり (27)	不登校 (74.6)	平熱36℃未満 (70.2)	平熱36℃未満 (70.2)	腰痛 (76.6)	首、肩のこり (66.2)	不登校 (68.1)	すぐ“疲れた”という (66.4)	アレルギー (66.9)
高校	1978年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年	2015年	2020年
第1位 腰痛 (40)	アレルギー (83.0)	アレルギー (88.8)	アレルギー (88.8)	アレルギー (89.2)	アレルギー (86.7)	首、肩のこり (74.5)	アレルギー (78.7)	ネット・ゲーム依存傾向 (77.1)
第2位 背中ぐにや/朝礼でボタン (31)	すぐ“疲れた”という (75.9)	腰痛 (80.4)	腰痛 (80.4)	すぐ“疲れた”という (82.0)	腰痛 (71.4)	うつ傾向 (72.7)	夜、眠れない (68.9)	アレルギー (69.1)
第3位	腰痛、頭痛を訴える (75.0)	腰痛、頭痛を訴える (76.6)	腰痛、頭痛を訴える (76.6)	腰痛、頭痛を訴える (80.2)	平熱36℃未満/腰痛、頭痛を訴える (69.5)	アレルギー (69.1)	すぐ“疲れた”という/首、肩のこり (62.8)	頭痛を訴える (68.6)
第4位	視力が低い (67.0)	すぐ“疲れた”という (74.8)	すぐ“疲れた”という (74.8)	腰痛 (79.0)	夜、眠れない (67.3)	すぐ“疲れた”という (62.8)	肩のこり (62.8)	腰痛/すぐ“疲れた”という (65.5)
第5位	腰痛 (66.5)	首、肩のこり (73.8)	首、肩のこり (73.8)	不登校 (75.4)	すぐ“疲れた”という (67.6)	腰痛/すぐ“疲れた”という (65.5)	平熱36℃未満 (61.6)	夜、眠れない (59.0)

注：表中の数値は回答率 (%) を示す。出典は、子どものからだと心・連絡会議 (2023)。

2007-08年調査で増加していき、2017-18年調査では頭打ちといった状況にある。加えて、気持ちを抑えがちでいわゆる“よい子”とみられがちな「抑制型」の出現率が、男女を問わず1998年調査以降、1割程度ずつ観察され続けている様子も確認できる。このような結果は、落ち着きがない子どもが、特に男子で多く観察できるとともに、一定数の子どもは“よい子”を演じなければならない状況にあることを示唆している。

また、「すぐ“疲れた”という」といった実感は、「平熱36℃未満」、「腹痛、頭痛を訴える」等の実感とも相まって、自律神経機能の問題を予想させる。この点については、寒冷昇圧試験という手法を用いてその実態把握が行われている。そしてそこでは、中国・昆明の子どもに比して日本の子どもの昇圧反応が大きい様子が確認されている。もとより、外界からの刺激に対する過剰な反応は、交感神経が優位であることを示しており、“臨戦態勢状態”あるいは“過緊張状態”と解することができる。そのため、疲労にもつながりやすい。事実、疲労感の多い子どもはそれが小さい子どもよりも昇圧反応が大きい様子も確認されている(鹿野・野井, 2014)。つまり、日本の子どもたちは日常的に緊張傾向にあり、疲れをため込みやすい様相を呈しているのである。

さらに、前頭葉機能や自律神経機能に関するこのような調査結果は、その背景に睡眠・覚醒機能の問題が存在していることも予想させる。実際、「夜、眠れない」や「朝、起きられない」といった実感は直近の実感調査でも「最近増えている」の上位項目である。また、世界で一番寝ていないのが日本の子どもたちといわれているし、子どもの生体リズムの乱れを示唆する報告も数多い。その上、「近隣地域における社会的資本」→「親の生活習慣」→「子どもの身体活動/スクリーンタイム」→「子どもの睡眠問題」といった問題構造の経路も確認されている(Noi et al., 2021)。つまり、子どもの睡眠問題は、単に子どもだけの問題とはいえず、社会全体の問題といえるのである。

一方で、米国の精神科医Hermanは、その著書『心的外傷と回復』(1999)の中で、虐待を受けている子どもの多くが「警戒的過覚醒状態」にあり、“よい子”

でいることを強いられ、睡眠と覚醒、食事、排泄等の正常な周期の乱れを呈することを指摘している。対して、日本の子どものからだに関する上記の調査結果は、いずれも園や学校に通っている、いわば「健康」と思われている子どもたちを対象に実施されたものばかりである。にもかかわらず、そこに示されている症状は、虐待を受けている子どもたちと共通するものばかりといえないだろうか。つまり、日本の子どもたちの多くは被虐待児と同じ身体症状を呈していると解釈できるのである。

いずれにしても、この間の実態調査の結果は、子どものからだがかなりの試練に見舞われていることを示唆している。

3. “からだのおかしさ”の現在地

3.1 「人間の危機」から「ヒトの危機」へ

前述のように、1991年当時は人間にとって第三級、すなわち発達の問題というのが「人間の危機」の認識であった。確かに、上記の実態調査が示す結果は、前頭葉機能にしても、自律神経機能にしても、睡眠・覚醒機能にしても発達不全という問題、もしくは不調という第二級の保護問題と整理することができるのかもしれない。しかしながら、事態は一層深刻であるとも考える。

2022年度は、いじめの認知件数も、長期欠席者数も、校内暴力、家庭内暴力の認知件数も、それらの総数が過去最多を記録した。このうち「長期欠席(30日以上)」ということでは、小学校で196,676人なので35人学級に1.11人ずつ、中学校でも263,972人なので40人学級に3.25人ずつ存在することになる。しかも、この統計にフリースクールに通っている子どもや保健室登校の子どもは加味されていない。さらに、「自殺(5~19歳)」ということでも、1年で783人である。そのため、毎日2.15人ずつの子どもが自らの命を絶っている計算になる。これらを「人間の危機」論が提起された1991年値と比較してみると、2022年の出生数は37.0%減(1991年値:1,223,245人)であるにもかかわらず、「自殺(5~19歳)」は92.4%増(1991年値:407人)、「長期欠席」は

小学校で201.5%増（1991年値：65,234人）、中学校で156.1%増（1991年値：103,069人）といった状況である。

これらは、発達の問題を陵駕して保護の問題、さらには“種の持続”とも関わる生存の問題と解することができる。そして、この間の子どもの“からだのおかしさ”は、それらの問題を教えてくれていたとも考えられないだろうか。「心」の身体的基盤と捉えることができる前頭葉機能の調査結果ではストレス耐性に弱い「不活発型」やストレスをため込みやすい「抑制型」が増えている状況が確認されてきていた。同様に、自律神経機能の調査結果では疲れをため込みやすい状況が、さらに睡眠・覚醒機能の調査結果ではゆっくり、ぐっすり眠ることさえできていない状況等が確認されてきていた。これらを勘案すると、発達の問題に加えて、保護や生存の問題が表出されるのも何ら不思議ではない。

このように考えると、当初は発達の異変として表出され始めた子どものからだの問題が、この30数年間で保護といった第二級、さらには生存といった第一級の問題にまで遡及していると理解できるのである。ここに、私が「人間の危機」を「ヒトの危機」に改める根拠がある。

なお、これまでも私は「動物的危機」という言葉を使ってその問題を提起してきた（野井，2021）。その意味は、睡眠や身体活動、低体温傾向に関わる問題にまで異変が表出し始めた状況を鑑みて、人間的というより動物的な問題と考えることができるからであった。すなわち、ここでいう危機は一個体内での危機のレベルを指すものであった。ところが、出生数の減少や自殺者数の増加は、一個体問題を越えて「ヒト」という“種の持続”の問題であると捉えこともできるため本稿では「ヒトの危機」とした。

3.2 国際社会がみた日本の子どもの現状

では、日本の子どものからだに表れた“おかしさ”の原因をどのように考えればいいのか。以下は、この点に関する1991年当時の解釈である（正木，1991）。少し長くなるが、当時の認識が明確に示されているので引用しておきたい。

「わが国において、おとな本位にからだをあまり使わなくてもよい便利な生活を急激に発展させてしまった。これらの生活は、おとなにとって快適な生活ではあるが、子どもがからだを使ってからだを発達させるチャンスを奪うことになってしまう。その上、受験戦争が激化する中で子どもたちは戸外で元気に遊ぶ時間も少なくなっている。子どもの数の減少により子どもの遊び集団ができにくくなってきている。また、安全に遊ぶことのできる空間も極端に少なくなっている。さらにはからだを動かさなくても遊べるテレビやテレビゲームの普及により、ますます子どもは室内にとじこもることになる。これらはいずれも子どもがからだを使ってからだを発達させるチャンスを二重、三重に奪うことになっている。そして、からだの働きを衰えていくのを早めることにもなっていく。」

すなわち、便利で快適な生活や受験戦争という社会が子どもの生活を変貌させたことにより子どものからだの発達が阻害されているとの認識である。ただ、これについても、その後の事態は一層深刻であるとともに、国際的な常識に照らしても異常な事態に至っているといえそうである。

日本も批准している「子どもの権利条約」の第44条には、「1. 締約国は、(a) 当該締約国についてのこの条約が効力を生ずる時から2年以内に、(b) その後は5年ごとに、この条約において認められる権利の実現のために取った措置及びこれらの権利の享受についてもたらされた進歩に関する報告を国際連合事務総長を通じて委員会に提出することを約束する」と定められている。日本政府もこの約束に従って、1996年に第1回報告、2001年に第2回報告、2008年に第3回報告、2017年に第4・5回統合報告をそれぞれ提出してきた。

そして、これらの報告書の審査結果として、国連子どもの権利委員会により示された「最終所見」では、当初から日本の「極度に競争的な教育制度」に対する懸念とその是正に関する勧告が示されてきた。そればかりか、第4・5回の最終所見では、「社会の競争的な性格により子ども時代と発達が害されるこ

となく、子どもがその子ども時代を享受することを確保するための措置を取ること」(パラグラフ 20-a) (Committee on the Rights of the Child, 2019) が勧告されるに至っている。

このような勧告は、過去3回の最終所見における教育制度から社会全体の問題に拡大していること、発達の歪みだけでなく子ども時代の剥奪にも踏み込んでいることから、これまで以上に深刻な懸念と勧告と理解されている。それだけでなく、世界広しといえども日本だけに示されている懸念と勧告であることも確認されている(野井, 2021)。

けだし、塾や習いごとで多忙な毎日を送っている子どもたちの姿は、そのことを分かりやすく教えてくれている。また、眠りたくても眠れない、遊びたくても遊べない新自由主義の潮流の中では、それらが許されない状況もある。その上、幼い頃から友だちと競争することを強いられ、失敗をすれば自己責任が問われ、将来さえ見通せない現状さえある。加えて、教育費の公的支出が十分とはいえない中、子どもの相対的貧困率も高値安定といった状況が続く。これでは、被虐待児と酷似の身体症状を呈するのでも理解できる。まさに、社会的虐待である。

このように考えると、便利で快適な生活や受験競争という社会による生活の変貌だけでなく、そのような社会そのものが当然のこととして保障されるべき、最善の利益、差別の禁止、生命・生存・発達、意見表明等々の権利を根こそぎ奪い、子ども時代そのものを剥奪しているとの指摘も納得できる。これが国際社会からみた日本の子どもたちの現状である。まさしく、日本の子どもに表れた「ヒトの危機」といえるだろう。

国連子どもの権利委員会によるこのような現状認識には、上記の実態調査が少なからず影響したといわれている。この点については、別の解説を参照されたい(野井・山岸, 2020)。

4. コロナ禍で得た教訓

4.1 コロナ緊急調査の結果

このように、日本の子どもたちはそもそも試練に

見舞われていた。ところがその後も、さらなる試練が日本の子どもたちだけでなく、世界中の人々を襲うことになった。いうまでもなく、コロナ禍である。

この緊急事態に直面して、子どものからだと心・連絡会議と日本体育大学体育研究所は、Webによるコロナ緊急調査を実施した。その結果、急な呼びかけであったにもかかわらず、2020年5月実施の休校中調査には、埼玉、東京、神奈川、静岡の公立小学校、中学校が31校も参加してくれ、2,423組の小中学生とその保護者の声を集めることができた。その後、およそ3ヵ月間に及んだ休校措置が解かれて、多くの地域で学校が再開されたのは5月下旬のことであった。分散登校や時差登校から始まり、次第にいつもの日常を取り戻すのかと思いきや、そうともいわずに窮屈な学校生活が強いられる中、休校明け調査が行われたのは2020年6~7月のことであった。この調査にも、1,341組の小中学生とその保護者が回答を寄せてくれた。振り返ってみると、当時の日本では類似の調査がいくつか行われていた。だが、この規模の調査は他にない。そのため、コロナ禍の日本の子どもたちの様子を最も正確に映し出した調査といえるのかもしれない。ここでは、この調査の結果の一部をご覧いただきたい。

図1には子どもの困りごと、図2には保護者の心配ごとの訴え率をそれぞれ示した。これらの図が示すように、子どもの困りごと、保護者の心配ごとも、同一項目で比較できるすべての項目(12項目)で休校中に比して休校明けの訴え率が減少していた。また、休校中調査における子どもの困りごとと保護者の心配ごとの上位5項目が見事に一致する様子も示された。このような結果は、突然の臨時休校が子どもを大いに困らせ、保護者を大いに心配させていたことを教えてくれている。当然といえば、当然の結果である。

ところが、上位5項目の順位を丁寧に見比べてみると、両者の順位が微妙に異なる様子も示された。具体的には、子どもの困りごとの第1位が「(思うように)外に出られないこと」、第2位が「友だちに会えないこと」、第3位が「運動不足になってしまうこと」、第4位が「感染症が不安なこと」、第5位が「勉強を教えてもらえないこと」であったのに対して、

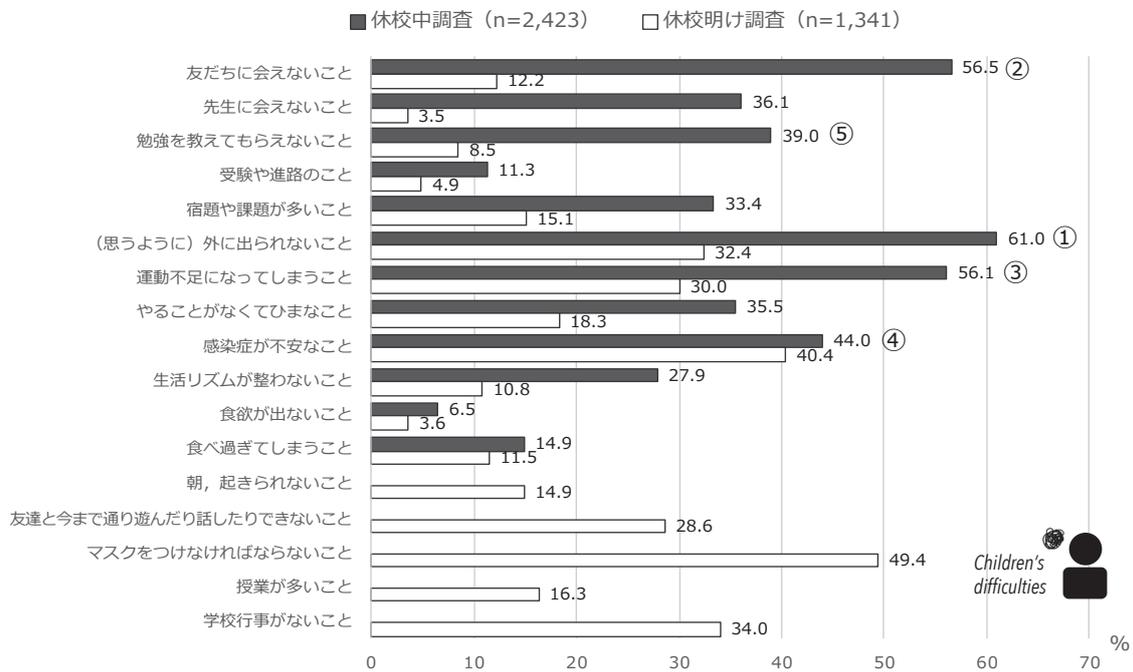


図1 コロナ休校中と休校明けにおける子どもの困りごと

注；表中の①～⑤は、休校中調査における上位5項目を示す。田村ほか(2022)を基に筆者作図。

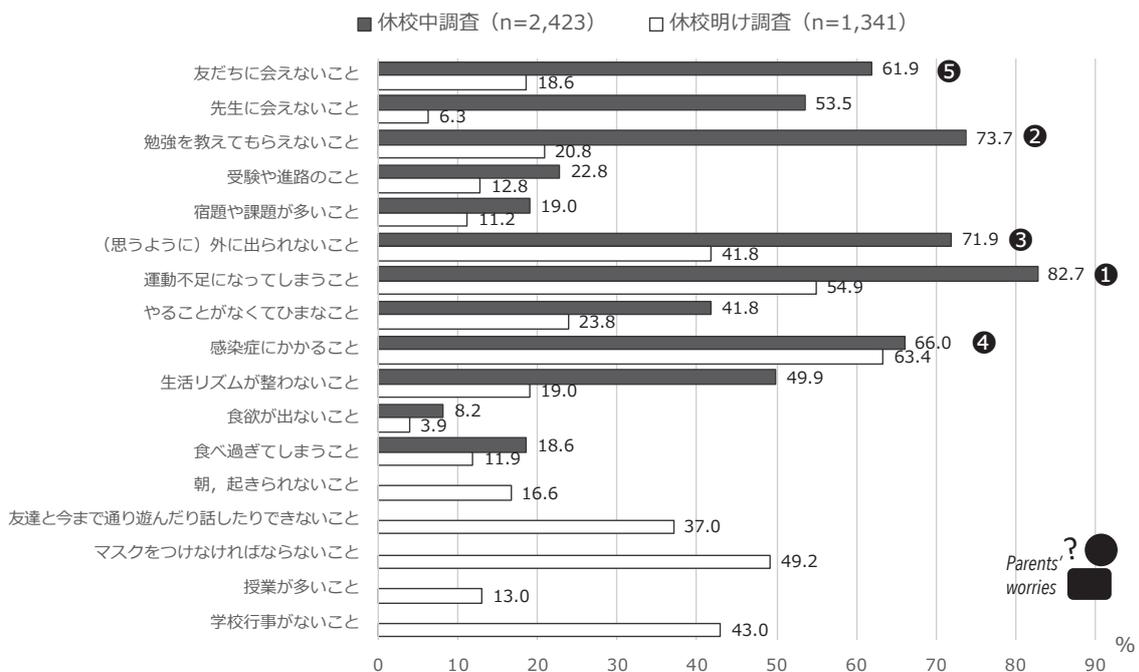


図2 コロナ休校中と休校明けにおける保護者の心配ごと

注；表中の①～⑤は、休校中調査における上位5項目を示す。田村ほか(2022)を基に筆者作図。

保護者のランキングではその第1位(外に出られないこと)と第3位(運動不足になってしまうこと)、第2位(友だちに会えないこと)と第5位(勉強を教えてもらえないこと)が入れ替わっていたのである。このような結果は、おとなの認識とは異なる子どもからみた学校の存在意義を教えてくれているようにも思う。なお、学校段階別の集計等、本調査の知見は田村ほか(2022)の報告が詳しい。

いずれにしても、日本ではSociety 5.0(超スマート社会)の実現が叫ばれる中、公教育の在り方が各方面で模索されている。その際、学校に求める子どもの本音を垣間みることができるこのような調査結果は、今後の学校や教育の在り方に関する議論に有益な情報を与えてくれているとも考える。

4.2 “からだのおかしさ”の解決の糸口

さらに、図1, 2の結果は、子どもの“からだのおかしさ”の解決の糸口も示唆してくれている。

コロナ禍では、これまで経験したことがないような活動自粛を強いられ、ヒトが動物であることを改めて認識させられた。動物は、“動く物”と記すように、元来動かなければヒトにも、人間にもなれない。その点、人類の歴史の99%はSociety 1.0(狩猟採集生活)である(長谷川, 2001)とともに、ヒトの遺伝情報は狩猟採集生活に適したままである(Eaton et al., 2002)ともいわれている。

実際、現代社会で狩猟採集生活を続けているハッザ族を対象にした研究では、1日の移動距離が女性9km, 男性15kmと報告されている(Wood et al., 2021)。そのため、生活習慣病は極めて稀ともいう。対して、現代日本でそのような日常生活を送っている者は少数といえる。そのような生活は、自らの遺伝情報とミスマッチである。これでは、生活習慣病が蔓延するのも当然といえよう。

さらに、ヒトは人間でもある。人間は、“人の間”と記すように、一人で進化してきたわけではない。家族や仲間とともに協力、共存しながら進化してきたことを推測させる。実際、ゴリラ研究の第一人者であるYamagiwa(2015)が提示する次の仮説は、子育てのために社会が生まれた、子育てのために群れる仕組みができたことを示唆している。

「進化の過程で草原に飛び出した人類は大型肉食獣と遭遇して、子どもを失う危険に直面することになった。それを多産で切り抜けるために早期離乳で出産間隔を短くした。また、大きな脳の獲得は、急速な脳の成長のためのエネルギー分配を招くことになり、からだの成長の遅れを引き起こすことになった。そのため、頭でっかちで手がかかる子どもをたくさん抱えることになった。そうすると、親だけでは育てることが困難になって、家族と複数の家族を含む共同体という二重構造が人間の社会に生まれた」

このように考えると、人類は「生きるために動き、子育てのために協力しながら進化してきた」といえないだろうか。さらにいえば、「動いてヒトになり、群れて人間に進化してきた」のである。このことは私たちが人間であることを止めない限り、Society 5.0時代が到来しても、AI社会が到来しても同じである。むしろ、そのような社会になればなるほど、「動くこと」、「群れること」が制限されてしまう恐れがあることは、ここ数年間のコロナ禍の生活で誰もが嫌というほど経験してきた。だとすれば、「動くこと」、「群れること」の重要性は、これまで以上に強く意識しておく必要がある。

同時に、前述の休校中調査において「(思うように)外に出られないこと」(第1位)、「友だちに会えないこと」(第2位)に困っていたという子どもの声は至極当然の叫びであるとともに、人類がヒト(動物)であること、人間であることを敏感かつ本能的に感じて、おとなや社会に改めて教えてくれているようにさえ思う。つまり、「動くこと」、「群れること」は子ども時代の本質であり、ここに“からだのおかしさ”の解決の糸口を感知できるのである。

子どものからだと心・連絡会議や教育科学研究会「身体と教育」部会では、古くから、幼児がからだを思い切り使って群れ合う「じゃれつき遊び」(野井, 2003)、体育の授業で小学生が台車に乗ったり、高所から飛び降りたりできる場を工夫した「ヤマニールランド」、小中学生が集団で思う存分自然を体感する30泊31日の「長期キャンプ」(土田ほか, 2009)、さらには、不登校経験を有する高校生が森林ウォー

クや沢登り、ものづくり等を通して次第にからだを開放していく「からだの授業」(中坊, 2019)等々の実践が注目されている。そこでは、子どもたちが目を輝かせて、嬉々として活動する姿が印象的である。このような様子は、いつの時代の子どもたちも「動くこと」、「群れること」を本能的に希求している姿といえよう。今後は、実感、実態、実践といった「3つの実」(野井, 2016)の視座から、上記の実感調査や実態調査に加えて、これらの実践の効果を客観的、科学的に追究していくことにもより積極的に取り組んでいくべきである。

5. 結語：本稿のまとめ

以上のように、本稿では子どもの“からだのおかしさ”が依然として認められる様子を確認した。そのため、1991年に警鐘された「人間の危機」は解決されないまま残存しているといえた。そればかりか、当時は第三級もしくは第二級の問題と捉えられていた“おかしさ”が、わずか30数年間で第二級、第一級の問題にまで達してしまっているとさえいえた。このような変化は、人類の歴史の長さを考えるととてつもなく急速な展開である。なかでも、子どもや若者の自殺が示唆する生存問題は、“種の持続”に関わる「危機」と解することができる。科学は積み上げの作業であるとともに、そこで知り得た情報は万人のものである。だとすれば、まずは従来の「人間の危機」を「ヒトの危機」に改めた上で、それを発信する必要がある。本稿をまとめたのはそのためである。

ただ、“からだのおかしさ”で教えてくれたのと同じように、コロナ緊急調査では「動いてヒトになり、群れて人間になる」といった人類を守り育てるための条件も、子どもたちは自らの本能で気づき、示唆してくれていた。そしてこの条件は、子どもの“からだのおかしさ”の解決の糸口にもなり得る可能性を秘めているとも考えられた。

付記

今年(2024年)は、国連総会の全会一致で子ども

の権利条約が採択されて35年、それが日本で批准されて30年の節目の年である。そのため、全国各地で子どもの権利の確実な保障のための議論が旺盛に展開されることを期待したい。本稿が、そのような議論の契機になれば幸いである。

文献

- Committee on the Rights of the Child: Concluding observations on the combined fourth and fifth periodic reports of Japan, 2019. https://tbinternet.ohchr.org/_layouts/15/TreatyBodyExternal/Download.aspx?symbolno=CRC/C/JPN/CO/4-5&Lang=En (2024年2月20日アクセス)
- Eaton SB, Strassman BI, Nesse RM, Neel JV, Ewald PW, Williams GC, Weder AB, Eaton III SB, Lindeberg S, Konner MJ, Mysterud I and Cordain L (2002) Evolutionary Health Promotion, 34, 109-118
- 長谷川真理子 (2001) 進化心理学の展望, 科学哲学, 34: 11-23
- Hernman JL (中井久夫訳) (1999) 心的外傷と回復 (増補版), 東京, みすず書房
- 子どものからだと心・連絡会議 (2023) 子どものからだと心白書2023, 東京, ブックハウス・エイチディ
- 正木健雄 (1991) “人間の危機”論の進展—子どものからだの変化の進行とともに—, 日本体育大学紀要, 20, 101-109
- 中坊恵太 (2019) 子どもが育つ“からだ”の授業, 子どものからだと心白書2019, (子どものからだと心・連絡会議編), 東京, ブックハウス・エイチディ, 35-37
- 日本体育大学体育研究所 (1981) 日本の子ども・青少年のからだの調査—「子どものからだ」アンケート報告書, 日本体育大学体育研究所所報, 5, 185-221
- 野井真吾 (2003) 子どもの輝く目を求めた実験のとりくみ—“教育生理学”的分析から—, 教育, 693, 29-36
- 野井真吾 (2016) 保育・教育現場等とのコラボレーションからみた発育発達研究の課題, 子どもと発育発達, 14, 26-32
- 野井真吾, 山岸利次 (2020) 競争社会のもとの子どものからだところをめぐる課題, 国連子どもの権利条約と日本の子ども期—第4・5回最終所見を読み解く— (子どもの権利条約市民・NGOの会編), 東京, 本の泉社, 41-50
- Noi S, Shikano A, Tanaka R, Tanabe K, Enomoto N, Kidokoro T, Yamada N and Yoshinaga M (2021) The pathways linking to sleep habits among children and adolescents: A complete survey at Setagaya-ku, Tokyo, International Journal of Environmental Research and Public Health, 18: 6309
- 野井真吾 (2021) 子どもの“からだと心”クライシス「子ども時代」の保障に向けての提言, 京都, かもがわ出版

- 野井真吾, 鹿野晶子, 中島綾子, 下里彩香, 松本稜子
 (2022) 子どもの“からだのおかしさ”に関する保育・
 教育現場の実感:「子どものからだの調査2020」の結果
 を基に, 日本教育保健学会年報, 29, 3-17
- 鹿野晶子, 野井真吾 (2014) 子どもの疲労自覚症状の実態
 と自律神経機能との関連: 自覚症状しらべと寒冷昇
 圧試験を用いて, 発育発達研究, 62, 34-43
- 田村史江, 今井夏子, 田中 良, 鹿野晶子, 吉永真理, 野
 井真吾 (2022) COVID-19パンデミックによる長期休
 校中と休校明けの子どもの困りごとと保護者の心配
 ごとの実態, 日本幼少児健康教育学会誌, 7, 83-96
- 土田 豊, 崎野隆一郎, 野井真吾 (2009) 生命を大切にす
 る心を育む長期キャンプの実践, 埼玉大学教育学部
 附属教育実践総合センター紀要, 8, 203-211
- Wood BM, Harris JA, Raichlen DA, Pontzer H, Sayre K,
 Sancilio A, Berbesque C, Crittenden AN, Mabulla A,
 McElreath R, Cashdan E and Jones JH (2021) Gendered
 movement ecology and landscape use in Hadza hunter-
 gathers, *Nature Human Behaviour*, 5: 436-446
- Yamagiwa J (2015) Evolution of Hominid Life History
 Strategy and Origin of Human Family, (Furuichi T,
 Yamagiwa J and Aureli F eds), *Dispersing Primate
 Females: Life History and Social Strategies in Male-
 Philopatric Species*, Springer, 255-285

(受付: 2024年2月26日, 受理: 2024年3月22日)